

施設介護実習を終えて

家政科生活福祉専攻

青木君代

京都短期大学家政科生活福祉専攻は、平成9年4月より介護福祉士養成施設として、厚生省の認可を得て定員40名で発足し、京都北部で唯一の養成校となりました。介護福祉士養成にあたって、実習はウェイトの高いものとなっており、特に学外実習の施設介護実習は450時間(10単位)で、実習施設の認可に於いても開設3年以上となっており、近隣に於いて実習施設として該当する所が少なく、遠く丹後町、京北町、亀岡市、丹波町、但東町等の施設の承諾を得ました。その内訳は14の施設が特別養護老人ホームで2施設が身体障害者療護施設です。

実習先が遠方の上交通の便が悪い為、実習前後の送迎は学校がバスや自動車を用意し実施しました。又実習期間中全員宿泊を前提としています。

実習施設への巡回指導は週2回と義務づけられており、教員全員がその任に当たります。又学生の配置メンバーに於いても、教員全員の合意の基に決定しております。

巡回指導は1施設1時間とし、学生にきめ細かな指導と共に実習担当者との情報交換や、中間、最終カンファレンスにも参加し学生の実習状況のチェックと諸問題の解決や今後の実習の方向づけとしました。

【介護実習】に於いては厚生省が示している【学生の講義、演習、学校内実習の進度に応じて3段階に分けるのが望ましい】とされており、当校も1段階で2週間、2、3段階で4週間としています。各段階の実習前に1日を事前学習日とし、実習終了後に2日間を報告会とします。いずれも学生の出席は勿論の事、教員も全員参加し意見交換や指導に当たります。又実習終了後の報告会に実習施設へ出席を依頼したところ、開校当初に比べ少しずつではありますが増えていく傾向にあります。

施設懇談会は例年5月に実施し、施設側より施設長、実習担当者の参加を頂き、学校側より学長、事務部長、教官でもって学生指導の方向性の統一や情報交換の場とします。毎回半数以上の施設の参加がありました。

特に第3段階の実習目標は、施設介護実習の総まとめとして位置づけ、日常生活援助技術を高め、施設運営のプログラムに参加し、処遇全般について理解すると共に、個別介護過程の展開をし、チームの一員として介護を遂行できることとしました。報告会には1、2回生共参加し、1回生は今後の実習の動機づけとしました。実習終了後、十日間余り連日夜遅くまで、各学生は報告会に向けて、まとめをしました。



平成12年度の第3段階の報告会は、さる12月21、22日の2日間にわたって、実施しました。例年2日共、1、2回生が出席していましたが、今年度はカリキュラムの関係で、1回生は21日のみの参加となりました。発表当日、学生の表情は緊張の中にも大きな難関を突破した時の心地よい安堵な気持ちと誇らしげな様子は、一段と大きく私の目に写

りました。

当日は早朝より、施設実習先の「美山やすらぎホール」と「こひつじの苑舞鶴」より指導者の出席があり、貴重な助言を頂き、学生達にとりまして何よりも心強いものとなりました。又学校側に取りましても、今後の学生教育のあり方を見直すよい機会となりました。

今回は特に個別介護過程の展開について発表し、内容は先ず利用者の情報の収集、問題・ニーズの把握、目標の設定、介護方法の選択(介護計画)、実施、結果、評価、考察、変更、修正といった一連の過程を体験学習したものでした。学生達はさまざまな障害をもつ利用者との関わりの中で、対人関係においての一番大切なコミュニケーションの所であつたもの、又情報収集が未熟で問題点が明確に出来ないもの、目標が具体的でない為に計画が抽象的になってしまったもの、又利用者の体調不良の為に計画を止む無く変更修正したものの実習終了前であり実施出来なかったもの等、多くの学生がさまざまな介護場面で困難を体験しました。又反面、宿泊を前提としていることにより、夜遅くまで実習について激論を戦わせたり、生活面においても学生間での助け合いが強まり、より実習効果が高められるといった面もありました。そういった実習の中で、学生が何を思い、何を考え、どう対応しようとしたのか、もう一度、実施した内容を冷静に見つめ直し、しっかりと分析する事により自分自身がどういう人間であるかということや、又言動の裏付けを科学的に正しく認識する事により介護そのものを深めることが出来ました。

介護基礎教育が科学的思考を基盤とした介護実践力であることから、この報告会を通して、学生は苦しみながらも、少しずつではあるが介護とは何か、介護の原点を、実践を通して実証することが出来たのではないかと考えます。又福祉、保健、医療全般に亘る広い視野とチームケアの一員として知識、技術を身につけると共に豊かな人間性を持つことの重要性を学び取っ

たとえます。この学びを深めるに当たって、施設指導員、寮母の方々、利用者の方々の計り知れない暖かいご指導とご援助を戴いたことに対して心よりお礼申し上げます。本当に有り難うございました。

この報告会を取り進む中で、学生の介護に対する熱い情熱と強い意志を肌で感じたり、又多くの感動を共感出来た事は、学生との触れあいの豊かさが、各学生の内面の充実に役割を果たしたのではないかと考えます。

そして自分自身の持つ豊かさや力量、見識以上のものを学生に、プレゼントすることは出来ないということを、しっかりと心に留めて学生に関わって行きたいと思います。

殆どの学生が実習最終日に利用者から、ありがとう、頑張ってたね、ご苦労様でしたと、涙乍らに言って頂いた利用者の真心のこもったプレゼントを心の糧として、今持っている情熱を、主体的、創造的に行動するエネルギーに換え、今後の福祉の道に、持ち続けて行って欲しいと願っています。

高齢社会の進む中で、介護への期待は大きくなって行きます。より質の高い、そして人間性の豊かな介護福祉士を養成するに当たり、養成校、実習現場、介護福祉士会の三者間でそれぞれの立場からの観点を重視した、共通の認識や理解が重要であり、その為の努力を惜しまず何よりも社会の期待に応えるべく、人材の育成に心血を注がなければならないと痛感しています。

そして介護は、実践（実習）から学問が出発するという立場から、施設の実習担当者の研修や、人権費用の手配、施設内での指導者としての身分の保障等、国の政策の中での早急に、取り組んで戴きたいと、念願します。

学内に於いては、教員が一丸となってアイデアを出し合い、学校内外を問わず福祉社会の情報を迅速に且的確に把握し、それを共有出来るシステム作りと同時にチームワークをいかに高めて行くかという事が大切であることと、卒後教育においても全国的規模でのシステム作りと専門職能団体としての社会的な位置付けに向けて教育内容の充実を期待したいと思います。

